水平線のムコウ　～Over the Horizon～　　元領事のつれづれ話

栃木県国際交流協会　参与　石塚勇人

（第 37 回：2022 年 6 月）

ギリシャ　～民主主義発祥の地～（その 1）

日本経済新聞の「私の履歴書」は、著名人の半生が 1 か月にわたって連載されているコラムですが、2022 年 5 月は漫画家の里中満智子氏の回でした。連載を読みながら、同氏の作品が膨大な数に上り、かつ様々なジャンルのテーマを扱っていることを知りましたが、とりわけ歴史ものが多いのが特徴です。これまで、女性漫画家の作品はほとんど読んだことはありませんでしたが、その中にあって唯一筆者が何度も繰り返し読んだ作品が、同氏の「マンガ　ギリシャ神話」でした。ギリシャに着任後、ギリシャのことを知るには先ず歴史から、いやその前にギリシャ神話とはどんなものかと思って、神話が体系的に描かれた日本語訳の本を手に取ってみたのですが、登場人物（神？）の関係が難解でページが進まず、すぐにあきらめてしまいました。そんなときに知人が譲ってくれたのが里中氏の全 8 冊の単行本でした。作品は、ギリシャ神話の全てが網羅されているわけではないものの、ギリシャ初心者がギリシャ神話の全体的なストーリーを理解するのにはうってつけの本だったと思っています。この本のおかげで、とっつきにくいと感じていたギリシャ神話が身近なものに感じられるようになったことを思い出しました。

ギリシャへのあこがれ

ギリシャには、最初の海外赴任の時から縁がありました。今から 43 年前、イスラエルへ赴任する際に経由地のアテネに降り立ったのが人生初の海外体験となりました。10 時間ほどあった飛行機の乗り継ぎの合間に訪れたアクロポリスの神殿では、学生時代に世界史の教科書に出てきたギリシャ遺跡を目の前にして、自分がその場に立っていることが現実なのかと不思議な感覚を覚えました。8 月上旬のアテネは夏の真っ盛りで、ぎらぎらと照り付ける太陽と乾いた空気の中を神殿の丘まで昇ると、アテネの白い街並みが眼前に広がり、遠くにはエーゲ海を一望できる景色は強烈な印象を放ち、つい前日まで暮らしていた日本の風景はいつの間に脳裏から遠のいていました。この年の初夏、日本ではエーゲ海を題材にした映画が話題になり、歌手のジュディ・オングによるテーマ曲が大ヒットしていましたが、そのイメージはまさに雲一つない空から太陽の光がぎら

ぎらと照り付ける真っ青なエーゲ海と、それを背景に真っ白な外壁にブルーの窓枠の建物が並ぶサントリーニやミコノスなどの島々で、日本ではおよそ目にすることのできない非日常の世界でした。出国前にこうした雰囲気に浸っていたことも、まだ見たことのないギリシャやエーゲ海へのあこがれと高揚感を掻き立てられたことを思い出します。

ギリシャの気候

ギリシャに着任したのは、2002 年 4 月でした。夏場には多数の観光客が訪れるギリシャも、4 月は風が強く肌寒い気候です。夏服ばかりを持参してしまい、しばらくの間は家族全員が寒い思いをして過ごすことになり閉口したことを思い出します。

一般的に、ギリシャの気候といえば、乾いた空気と真っ青な空に輝く太陽といった真夏を連想させるイメージが強いと思います。実際、7 月ごろが最も気温が高い時期で、本土のアテネでは気温が 40℃を超える日もしばしばです。真夏の太陽を求めて観光客が多く訪れるのもこの時期で、ミコノス島、サントリーニ島、クレタ島、ロードス島などは世界的にも名前の知られたリゾートです。その他にも、エーゲ海に浮かぶ大小の島々は、欧米をはじめ世界中からの観光客でごった返すほどの混雑です。ハイシーズンは、乾期の 6 月半ばから 9 月半ばごろまでの 3 か月ほどで快晴の日が続き、地中海、エーゲ海は波も穏やかで、保養には絶好の季節です。この時期、エーゲ海は定期船や貨物船に交じって観光フェリー、プライベートヨットなどが多数行き交い、さながら船舶銀座の様相です。本土や島々のビーチが多数の観光客で溢れかえっている状況を目の当たりにすると、観光がギリシャの重要な産業であることを強く印象付けられたものです。

一方、夏場のバカンス最盛期を過ぎ秋も半ばになると雨期に入り、アテネをはじめ本土でも不順な気候が続きますが、地中海、エーゲ海では風が強まり、特に冬場は日本でいえば津軽海峡のような大荒れの海に様変わりします。ギリシャ本土と島々を繋ぐ定期船の航路も天候によって欠航になることもしばしばといった状況で、これが春先まで続きます。2004 年 4 月には、ミコノス島からサントリーニ島へ向かった観光フェリーが嵐の悪天候により座礁し、30 名近い日本人乗客を含む数百名の乗客と乗員が救助船に救出されるという事故が発生したこともあります。また、着任した年の 11 月に北西部のテッサリア地方にあるメテオラを訪れたときのこと。ここは、数千万年前に隆起した砂岩が浸食されてできた奇岩群で、奇岩の上に修道院が建っていることで有名なギリシャの世界遺産ですが、訪れた時には氷のような雨が降っており、ガタガタ震えながらの観光となってしまい、素晴らしい風景も感動は半ばといったところでした。さらに、夏場のイメージからすると意外に思われるかもしれませんが、冬場にはアテネ市内でも降雪がみられます。国内には、数か所のスキー場があり、週末にはスキーやスノーボード客であふれるほどで、筆者の子供たちもスキーを覚えたのはギリシャでした。

古代ギリシャから近代国家成立・現代まで

古代ギリシャは西洋文明発祥の地で、民主主義、哲学、歴史学、医学、数学、自然科学などの他、古代オリンピックの発祥の地でもあります。古代ギリシャは、現在のギリシャ地域（バルカン半島南端及び島嶼地域）に多数の都市国家（ポリス）が林立しており統一国家ではありませんでしたが、諸ポリスは覇権争いによる対立や同盟などの離合集散を繰り返しながらも、言語や文化などで共通の基盤に立つ緩やかな集合体だったと言えます。この時期に開花したエーゲ文明が、後のローマ帝国とそれに続く西欧文明に影響を与えています。一方、諸ポリスの衰退後、この地域はマケドニア王国（アレクサンドロス大王が有名）により統一されます。マケドニアの滅亡後は、ローマ帝国による支配、ローマの分裂後は長い間東ローマ帝国（ビザンツ帝国）に属しますが、この時期にギリシャ正教会が発展します。ビザンツ帝国滅亡後は、イスラム国家であるオスマン帝国による支配を経て、近代統一国家として独立を果たしたのは 1829 年でした。

独立後は、王政となりましたが政治は安定せず、2 度の世界大戦を経た後にはギリシャ内戦が 3 年間続き、1967 年には軍事クーデターにより王政が終焉、その後軍事政権時代には経済の悪化により抵抗運動が続き、1974 年には軍事政権がキプロス内戦（キプロスにおけるギリシャ系住民とトルコ系住民との対立）介入に失敗して崩壊、その後共和制に移行して現在に至っているという経緯があります。

伝統あるギリシャの歴史をこんな簡単にまとめてしまうことには気が引けますが、要は西欧文明発祥の地であるギリシャが近代国家として現在の姿になったのは、長い歴史の上では比較的最近のことだったということです。その間、長きにわたってイスラム国家の支配を受けながらギリシャ語とギリシャ正教を維持してきたことは驚異というほかありません。

独立後はバルカン半島の小国に過ぎないギリシャでしたが、西欧社会は西欧文明発祥の地に対し敬意をもって接してきたように思われます。近代オリンピックの開催を提唱したフランスのクーベルタン男爵が、第 1 回のオリンピック開催地をアテネとしたことには、古代ギリシャ人の流れをくむギリシャへの配慮もあったのではないかと思います。また、ギリシャは欧州連合（EU）の加盟国ですが、メンバー27 か国の中では 10 番目に加盟（1981 年加盟：当時は EC）を果たしています。欧州の統合通貨であるユーロにも初期の 2002 年から導入しています。現在のウクライナ情勢によって世界の注目が集まっている北大西洋条約機構（NATO）への加盟は、設立から 3 年後の 1952 年と古参の国で、欧州各国の中でもそれなりの地位を占めて存在感を示してきていると言えるでしょう。

次回は、筆者の 3 年半にわたって滞在したギリシャの様子と、その後のギリシャ危機などについて触れてみたいと思います。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会　参与　石塚勇人（略歴）

1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。